

評

「ドローイングの可能性」展 文明と線 根源的な問い

「素描」とされがちなドローイングを「線を核とする表現」と広く捉える今展は、コロナ禍の前に企画され、その渦中で生まれた新作があり、美術館活動が再開された時にはコロナ禍後を生きる人々に鑑賞される。古代の絵もさまざまな設計図も線で表現されることを思えば、根源的な問いを是らんだ企画といえる。

第1章「言葉とイメージ」では、何と「書家」の石川九揚(1945年生まれ)の作品が並ぶ。確かに書は線の表現だし、石川の書は脱構築派の建築図面にも通じるが、ドローイングの概念をここまで



広げるといふ宣言にも映る。続いて、言葉と絵画の要素を併せ持つアンリ・マティス(1869~1954)の挿絵本の数々(写真上は展示風景)。ここでは、「ジャズ」

の原画が切り紙によることが強調される。そう、はさみで切っても線は生まれるのだ。線はさらに、不可視の領域にも拡張される。第2章「空間へのまなざし」の、戸谷成

雄(47年生まれ)による「視線一散」(2019年、写真下)は、中央の木の立方体から削られた破片が壁に飛び散り貼り付いたような表現だ。放射状に散った痕跡が線として見えるようでも、題名通り作者が空間に走らせた視線の束が見えるようでもある。同時に線の存在は、時代とも共振する。「視線」と聞けば、他者を監視するように注がれる状態をつい連想する。パリが拠点で、切った糸を壁に貼って描く盛圭太(81年生まれ)は、日仏での感染拡大の情報の中で、新作を仕上げたという。タービンのよう

な形は文明を表すように見えつつ、それがほつれている意味を思うことになる。

そして第1章の石川の書に戻れば、文字と建築を文明の象徴ととらえ、崩壊するビル姿を書きで表現した、9・11後の作品が出ている。人間は、文字や図、絵といった線で文明や文化を築き、線によって何かと何かをつなぎ、時に分け隔ててきた。今展は文明の脆弱さが露呈し、国と国、人と人との間の分断線が強調される一方、不可視のオンラインへの依存も高まる今、線の意味を再考させる。(編集委員・大西若人)

▽6月14日まで、東京・木場公園の東京都現代美術館。月曜休館。現在臨時休館中。